



2003 『賢治のまちから高校生童話大賞』受賞作品

優秀賞／銀の星賞

『ないしよないしよの星祭り』

山形県 県立山形西高等学校 一年 島 貫 春 菜

森の向こうのそのまた向こう，周りをぐるりと山に守られた，小さな村でのお話です。年に一度の星まつり，村は朝から大忙し。一年で一番星空の美しいこの夜は，お祭りのにぎわいに紛れて，村に神様が遊びにやって来るのです。

いつ神様が訪れてもいいように，人々は家を美しく飾りつけます。神様に気に入られた家には，何かいいことが起こると言われているのです。夕日が山の向こうに帰ってしまうと，いよいよ祭りが始まります。お店がたくさん広場に並び，一年で一番楽しい一晩が始まるとあって，準備に忙しい大人達の間を，子供達はそわそわはね回っています。

そんな村の中で一人だけ，笑顔になれずにいる女の子がいました。自分のお部屋でぼんやりと，窓の外で揺れる祭りちょうちんを見つめています。



賢治のまちから
高校生★童話大賞

「ねえ、やっぱり行っちゃだめ？ もうお熱も下がったよ。」

女の子は窓の外からふり返り、お母さんを見つめました。お母さんは困った顔でやさしく女の子の髪をなでて言いました。

「残念だけど、やっぱりダメね。まだまだ顔が赤いもの。また来年にしましょうね。」

お母さんが部屋から出て行ってしまおうと、女の子は枕に顔を押しつけて、悔やし涙を流しました。女の子は夏カゼをひいて昨日から熱を出していたのでした。お母さんは間もなく、お店の手伝いに出かけました。お父さんはやぐらを建てに行っていて、朝からいません。村の中で一人だけ、仲間はずれにされたようで、女の子の涙は止まりませんでした。

いつの間に眠っていたのでしよう。女の子が気がつくと、あたりはすっかり暗くなり、楽し気な声や、音楽が聞こえます。窓の外の様子うちん達も、色とりどりに明かりが灯り、女の子を誘うように楽し気に揺れています。

(ほんの少し、見に行くだけなら……)

女の子はそっと布団を出ると、そろりそろりと階段を降りてゆきましました。やっぱり、お母さんもお父さんもいません。しめた、思った女の子が、着がえようと部屋に戻りかけると、突然、玄関の戸をたたく音がしました。びっくりした女の子は危うくつまづく所です



たが、どうにか踏みこたえて、そっと玄関の方へと行ってみました。こんなお祭りの中、一体誰が訪ねて来たというのでしょうか。恐る恐る、小さな声で、女の子は戸の外へ向かって聞きました。

「どなたですか。」

すると、不思議なくらいよく通る、はきはきした声が返ってきました。

「おやおやびつくり大発見。こんな所にただ一人、祭りに行かない子が一人。」

歌うようにリズムをつけた、おかしな話し方をするお客さんです。

女の子はそうっと戸を押して、すきまからのぞくように見てみました。立っていたのは男の子。女の子より少し年上のように見えました。飾りのついた祭り帽子をかぶって、すらりと伸びた手足はよく日焼けしています。いたずらが好きでしかたない、と言わんばかりの目をして、にこにこ笑って立っていました。手には何やら大切そうに、大きな箱を抱えています。

「かぜをひいてて行けないの。」

女の子はさつきより少し大きな声で男の子に言いました。男の子はまた歌うように言います。

「見つけた見つけたお客さん。そんな人にも誰にでも、祭りはみんなにやって来る。」



男の子は箱を開けて、女の子に差し出しました。女の子はすっかり戸を開けて箱の中をのぞきこみます。入っていたのは七色に光る、細い糸の束でした。

「祭りの王様，引きくじだ。おいらはひきくじ配達人。病気の人もケガ人も，祭りはみんなで分けなくちゃ。」

「ひいていいの？」

女の子はパツと明るい笑顔になって，男の子の顔を見上げました。男の子は元気よくうなずいて，糸束の先を女の子に向けました。女の子はすっかりうれしくなって，糸束を見つめます。一本一本，きちんと長さのそろった糸達が，滝のように女の子の前に差し出されています。なんだか，どの糸も，一層キラキラ光って，選んでくれと女の子に言っているようです。ドキドキして少し震える指で，女の子は銀色の糸をつまみました。つうー，と引つぱると，先に何やらついてきました。黒くて小さい，種のようなです。男の子の笑顔は驚きの表情に変わりました。そしてさっきより大きな声で，興奮したように歌います。

「当たり前の大当たり！！正真正銘一等賞！！何かが起こるよその種を，浮かべてごらんよ水の上！」

女の子もびっくりして思わず大声を出してしまいました。

「当たり前なの？ 一等賞なの？」



「おめでとおめでとお客さん。うれしや楽し、祭りの夜だ!!」

男の子はそれだけ言うと、あつという間に走り去ってしまいました。あまりにも速くて、風がさらっていったのではないかと思える程でした。後に残ったのは、胸のドキドキと、くすぐったいような楽しい気持ち。

「だけど、一等が種だなんて、ヘンなくじ…。」

女の子は、手の平の上の種をつつきながらつぶやきました。

「それに、おかしい男の子だったなあ…。」

そう言ってもう一度戸の外を見ると、誰かがこちらに歩いて来ます。仕事を終えたお母さんでした。

「まあ、何してるの、そんな格好で。また熱が上がっちゃうわよ。早くおうちに入りなさい。」

お母さんは驚いて言うと、女の子と一緒に家に入りました。

「お父さんはまだみたいよ。お父さんもお祭り好きだからねえ。」

お母さんは笑いながら女の子にお祭りのお土産をくれました。きれいな小箱で、宝物入れにぴったりです。女の子は夢中になって、色とりどりにほどこされたガラス細工の装飾をながめていましたが、はっとして叫びました。

「お母さん!! 不思議な男の子が来たのよ。見たことない子でね、くじひき配達人、だって。私にくじをひかせてくれて、当たり前だっ



てこれにくれたのー……。」

手の平の中の種をお母さんに見せながら、女の子は男の子の言葉を思い出していました。

「浮かべてごらんよ水の上——」

ごはんを食べると、女の子は早めに布団にもぐり込みました。まだ少し顔が赤いので、お薬も飲みました。明日、もし良くなったら少しだけ祭りの片づけをながめられるかもしれませぬ。種は、お母さんが水を張ったコップに入れてくれました。

「どんなお花が咲くのかしらね。」

おやすみなさいの前に、お母さんは言いました。

(赤いお花だといいな。)

女の子は、大好きな赤い色の花びらをつけた花を思い浮かべました。そして目を閉じた女の子の胸はその赤い花が咲いたようにほこほことあたたかい気持ちでいっぱいでした。

そして、家の人もみんな寝静まってしまった真夜中、女の子は何かおかしな気がして目を覚ましました。するとびっくり。水に入れたばかりの種から、長く元気のよい茎がのびて、先に真っ赤な花を咲かせていたのです。今まで女の子が見たことのない、美しい花でした。花のまわりだけ、ふわふわ光っているようにも見えます。女の子がぼうっとなつて見とれていると、急に、窓ガラスがカタカタ



と鳴り出しました。次には家を揺るがす程大きな風がどどーと吹いて、女の子は布団をかぶって縮まりこんでしまいました。風が静まって、女の子がそつと顔を上げると、窓の外に何かがあります！背の高い、黒い影が、低くて太い声で威勢よく話しかけてきました。

「もしもしこんばんは。誰か起きてる者はおらんかね。」

女の子は布団をかぶったまま、消え入りそうな声で返事をしました。

「どなたですか。」

「おや、こりや幸い。すまんが開けてくれんかね。何も悪いことありませんよ。」

こんなに威勢の良い声で言われたら、言われたようにやるしかありません。女の子はこわごわ窓を開けました。開けてまたまたびつくり。そこにいたのは、雲にたくさん太鼓をのせた、青い大きな雷鬼でした。

「カミナリ様ですか？」

女の子は目をまんまるくして言いました。

「いかにも。わしやあ雷鬼。心配せんとも何もしないぞ。ただ、わしやその花を探してはるばる来たんじゃあ。」

雷鬼は長い指であの赤い花を指差しました。

「あのお花を？」

「そうじゃ。ありやあ、天界に咲く花なんだが、なかなか見つから



ん珍しい花でなあ。こんな所にあるとはびっくりしたぞ。それで、すまんがお嬢さん。あの花，わしに譲ってはくれんか？」

女の子は困ってしまいました。いくらカミナリ様の頼みとはいえ、このお花は女の子の宝物です。もじもじしていると、雷鬼も気がついたようで、すまなそうに言いました。

「…実はなあ，その花，わしのあこがれの虹色天女どのの好きな花でな。どうしてもこの祭りのおくりものにしたかったんじゃ…。」

雷鬼の青い顔が，花と同じ位，真っ赤になりました。女の子はそれを見て，思わず笑ってしまいました。世界のどこを探したって，照れて赤鬼になってしまった青鬼を見た人なんていないでしょう。女の子はすっかり楽しい気持ちになって，にっこりして青鬼に花を差し出しました。

「一本しかないけれど，素敵なおくりものだと思うわ。」

「いやあ，親切なお嬢さん。本当にありがとう。さて，何でお礼をしたらよいものか。—そうだ，これを差し上げよう。」

雷鬼は大喜びで花を受け取ると，それとは反対の手で，乗って来た雲を一握り，つかみ取りました。

「花の代わりと言ってはなんだが，それもなかなか見えていて飽きぬ。ただの雲とはちと違うぞ。」

雲はあたたかいような，ひんやりするような，重いような，軽いよ



うな、何とも不思議な手触りです。女の子がお母さんにもらった宝箱にその小さな雲を入れると、雲はぽっぽと光り出しました。光の色は緑に青、黄色に赤と次々に変わってゆきます。

「きれい!!! どうもありがとう!!!」

「気に入ってくれてよかったわい。こちらこそ本当に感謝しているぞ。では、お元気で、お嬢さん。」

「さようならあ。」

花を大切そうに持ち、飛び去って行く雷鬼に女の子は手を振りました。箱の中の雲は、色を変えて光り続けています。雷鬼の言う通り、いくら見ても飽きません。女の子はしばらく夢中になって見ていました。

すると、また、窓の外がザワザワしてきました。今度は一体何が来たのでしょうか。女の子は目をこらして、外を見つめました。キラキラ光る星の間から、白い影が近づいてきます。やってきたのは、大きな白いペガサスでした!!!

「こんばんは、お嬢さん。今夜も良い星空ですね。おたずねしますがその箱の、中身は雷雲ですか？」

きれいに並んだ長いまつげに縁どられ、神秘的な光を放つ目をしばたかせて、ペガサスは言いました。

「ええ。さつきカミナリ様にもらったの。」



「それはそれは。ではさぞかし新鮮な雲なのでしょうね。」

「そうかもね。こんなに光っているんだもの。」

「ああ本当に。…それですね、お嬢さん、どうかどうか、その雲をわたくしにくださいませんか？ 実を言うところのわたくし、うかつな事にこの祭りにはしやいで駆けすぎて、おなかの中が空っぽなのです。」

ペガサスは恥ずかしそうに頭をうなだれ、またまばたきをしました。すると、ペガサスのおなかのあたりで、くるくるというおかしな音が聞こえてきます。

女の子はまた、思わず笑ってしまいました。世界のどこを探しても、ペガサスのおなかの鳴る音を聞いた人なんていないでしょう。女の子はにっこりして、雲をペガサスに差し出しました。

「たった一握りだけど、少しはおなかがふくれるかしら。」

「ああ、本当に親切なお嬢さん！ こんなに美味しそうな雲は初めてです。何でお礼をしたらよいのか。—そうだ、これをお受け取りください。」

ペガサスは雲を出した空の宝箱に頭を近づけると、一回、二回とまばたきをしました。目から大粒の涙がこぼれて、箱はたちまちいっぱいです。

「どんなケガにも効く薬です。やけど、切り傷、打ち身にねんご。



骨折だって元通り。どうぞお使い下さい。」

それから雲を美味しそうに食べ、ペガサスは帰ってゆきました。女の子は涙でいっぱい箱を見ると、なんだか力がわいてくるようでした。

(この薬、かぜにも効くのかしら。)

そしてまたしばらくして、女の子がうとうととしていますと、窓をつつく音が聞こえてきました。本当にお客さんの多い夜です。

「今度はだあれ？」

窓わくにとまっていたのは、一羽のオスの星くじやくでした。星くじをちりばめたような見事な羽を広げて、しゃんなり座っています。

「どうも、おそくにすいません。しかし、こちらにペガサスの涙があると聞きました、やって来たわけでございます。」

「これのことね。」

女の子は箱のフタを開けて、くじやくに見えるように持ち上げました。くじやくはあんまりしゃんと首を伸ばしているので、目の前しか見えないのです。

「その通りでございます。わたくしめの足をごらんください。荒れ星のかけらにやられまして、うまくダンスもおどれません。」

女の子が見たくじやくの足は、痛々しく切り傷がついています。

「まことに勝手ながら、もしかしたら薬をいただけるかと思ってま



いました。

「どうでしょうか、お嬢さん。」

「もちろん。こんな傷，ほっておいてはいけないわ。」

「ああ，何と美しい心をお持ちの方でしょう。こんなものしかございませんが，どうぞお代としてください。」

そう言ってくじやくは自分の尾羽を一本，女の子に差し出しました。女の子が今まで見たことのある鳥の羽で，一番美しいものでした。

「ありがとうございます。」

「お礼なんてとんでもない。まだまだこちらがしたりないのですから。」

「でも，やっぱりありがとうございます。さあ，早く薬を飲んで。」

「では，この冠を持っていて下さいませんか。飲むのに頭を下げなくてははいけませんから。」

そう言うと，くじやくはすうつと首を前に伸ばして女の子の前にちようど頭が来るようにしました。女の子はそつとそつと，慎重に，きらめく冠をくじやくの頭から外しました。星くじやくの冠に触れ，その上外した人なんて，この女の子を除いて，世界のどこにいないのでしょうか。女の子はどきどきして，なんだか胸がいつぱいでした。くじやくはくちばしを箱に差し入れ，器用に薬を飲んでいきます。ごくぐり，と一口飲むごとに，足の傷もすう，と一つずつ消え



てゆきます。箱が空になる頃にはすっかり足は元通りでした。女の子が冠をくじやくの頭に、またそつとのせると、くじやくは大きくはばたいて宙に浮き、何度もお札を言って飛んでゆきました。宝箱からは、尾羽が入りきららずに突き出ています。次々と中身の変わる、忙しい宝箱です。

さて、また誰か来るかもしれませんが。女の子はすっかり目が覚めてしまつて宝箱と窓をかわるがわる見ていました。案の定、すぐ、小さなコツンという音がして女の子は飛び起きました。窓の外で丸くなっていたのは、手に乗るくらいの小さな鳥でした。小さい体をもっと小さくして、困つたように女の子を見上げています。

「あの、こんばんは。その、おそくにすみません。あの、しかしです、ね、どうも困つてまして、それで、その、助けていただきたくて。」おどおどしながら話す小鳥を見て、女の子はかわいそうになつてしまいました。

「まあ、そんなにおびえないで。何をそんなに困っているの？ 私に何ができるの？」

小鳥を部屋に入れて、女の子は優しく話しかけました。

「ああ、なんて、なんて優しい人なんだろう。じつ、実は私、天気を決める晴神様のペン持ち係をしています。しかし、今日お祭りの騒ぎの中で、うっかりペンを落としてしまったのです。あれがなく



ては、天気を決める“天気帳”に書くことができません。晴神様がお知りになったら、どんなにお嘆きになることか!! それは星くじやくの尾羽でしか作れない特別なペンなのです。あなた様にくじやくさんが羽をプレゼントしたと聞いて、あるいはと思つて飛んで来たのです。」

「これでいいの?」

女の子が箱を開けると、小鳥はちよんちよん飛びはねて言いました。

「おお、すばらしい!! こんなに立派な尾羽、見たこともありません。」

「これでよかったら、どうぞ持つて行って。」

小鳥は目をまんまるくして、女の子を見上げました。

「本当に、本当に、何とよい人なんだろう。お礼のしようもないくらいーああ、どうしよう。私には本当に何も無い。」

小鳥はくじやくの尾羽を前にして、また困り果てたようにしよんぼりしています。

「そんなこと、気にしないで。」

女の子は言いましたが、小鳥はまだ難しい顔をしています。しかし、しばらくして、小鳥は少し恥ずかしそうに、でもうれしそうに言いました。

「お嬢さん、歌は好きですか。何も持たない私ですが、歌には少々



自信があります。」

「お歌は大好き！！ 歌ってくれるの？」

「こんなものでよかったらー」

小鳥はその小さな胸をふくらませて、大きく息を吸いこむと、それはかわいらしい声で歌い出しました。めいっばいにくちばしを開いて、一生懸命に歌い続けます。聞いたとたん女の子は、夢の中にいるような、ぼわんとした心地良さに包まれました。こんなに幸せな気分になったのは、初めてかもしれせん。すると、突然、うす暗かった部屋の中が、まぶしい光でいっぱいになりました。生まれたてのような、小さな星達が、女の子の部屋に飛び込んで来たのです。星達は小鳥の歌に合わせて、くるりくるりとダンスします。

「すごい！すごい！ これこそ本当の星祭りなのね！！」

女の子はうっとり見とれました。小鳥が歌い終わると、星達もさーっと空に帰ってゆきました。小鳥はほほを赤くして、ちよこんとおじぎをしました。女の子は手をたたいて一羽のすばらしい歌手をたたえます。

「本当にお歌が上手なのね。何よりも素敵なお礼だったわ。」

「そんな…本当にありがとうございました。それでは、そろそろ帰ります。お元気で、親切な人間さん。」

女の子は小鳥を見送ると、前におばあちゃんに聞いた話を思い出し



賢治のまちから
高校生★童話大賞

ました。星を呼び集める歌を歌う、「星呼び鳥」のお話です。星呼び鳥は、本当に心のやさしい人の元にしか訪れない、とおばあちゃんは言いました。なんだかかくすぐったい気持ちになって、女の子は布団にもぐり込みました。そしていつの間にか、眠りこんでしまいました。

次の朝、目を覚ますと、きのうの晩の事がうそのように、いつもと同じ朝でした。様子を見に来たお母さんが、種の失くなったコップを見て、不思議そうに言います。

「あら、どうしたのかしら。窓も開いてるし、鳥さんが持って行ったのかしら。おかしいわねえ。」

女の子の額に手をあてると、お母さんはにこりとして言いました。

「あらあ、でもお熱は下がってるし、良くなったみたい。お花だけ残念ね。」

女の子もにこりとして、元気に言いました。

「でも、いいんだ！！ すっごくいい事があったから！！」

「そう。よかったわね。」

いい夢でも見たのかしら、とお母さんは思いましたが、うれしそうに女の子を見て、特に気にはしませんでした。

女の子はその日の午後、お父さんと一緒にやぐらやちようちんの片付けを見に行きました。お父さんは、



「今年は見られなくて残念だったけど、また来年があるさ。」
となぐさめましたが、女の子は得意げに、

「今年は本物の星祭りを見たもーん！！」

と言って、元気に駆け出しました。女の子を追いかけながら、お父さんは何のことだかさっぱりわかりませんでした。神社まで走って来たとき、女の子は突然、あの男の子が誰だったのかわかりました。そして、やっと追いついてきたお父さんに向かって言いました。

「お父さん、今年のお祭りで神社が選んだおうちどこか知ってる？
うちだよ！！」

お父さんがきよとんとしているのを笑いながら、女の子は心の中で、
神様にお礼を言いました。